

舞踊の人類学

— 展望と試論 —

石福 恒雄

舞踊学は最近とみに体系的に体裁をととのえてきておりますが、それは一つには人類学研究に負うところが大きいと思います。そこで、ここでは舞踊の人類学がどのようにして形成されてきたかを — 時間が大変限られておりますが、— 概観して、そのあとに、前回の舞踊学会におきまして研究致しましたインド・ネパールの仮面舞踊のうち、ヤクシャガナーナについて短い考察を行いたいと思います。

先づ、人類学に貢献した全部の人に言及することは勿論できませんので、ここでは、米英からそれぞれ2人ずつ、4人が舞踊についてどのように語っているかを検討してみたいと思います。

アメリカ人類学の父といわれるフランツ・ボアズ F. Boas (1858~1942) は、進化主義に反対して、文化はその文化の独自性の観点からみななければならないと主張しました。彼はエスキモ—クワキウトル族 Kwakwiltl のフィールド・ワークで有名ですが、クワキウトル民族誌には、舞踊の記載がかなり詳しく行われています。1895年彼は長い期間クワキウトル族の中に滞在して現地調査を行いました。冬の儀礼 Winter Ceremonial の部分が、特に舞踊を多く扱っています。彼はクワキウトルの生活には、ゆりかごから墓場まで踊りがつきまとう……歌と踊りはクワキウトルのすべての生活についてまわり、それはこの民族の文化の本質の部をなしていると言っています。

英国の社会人類学の創始者となったラデクリフ・ブラウン Radcliffe-Brown (1881~1955) は、アンダマン諸島についてのくわしい民族誌をのこしていますが、その中で相当踊りにも言及しています。アンダマン人 Andaman Islanders はなぜ踊るかときかされると、楽しいから踊るとい……踊ることは解放感を味わい、自分の力と価値観を高め、共同体の一致と協調がすべての成否に通じ感じられるような状態を作りだすと述べています。F. ボアズの数多い弟子の一人としてルース・ベネディクト R. Benedict (1887~1948) がいますが、彼女は文化をディオニソス型とアポロ型にわけ、舞踊についてもこの分類を適用しています。彼女もアメリカ・インディアンの研究を行いました。プエブロ族 Pueblo をのぞけばすべてディオニソス型とし、踊りについてもアポロ型 Apollonian, ディオニソス型 Dionissian に分けていますが、ディ

オニソス型の代表としてクワキウトルの踊りをあげています。この相対主義は現代の舞踊人類学にも強い影響を与えています。

エヴァンス・プリッチャード E. E. Evans Pritchard (1902~1973) は、ラディクリフ・ブラウンとマリノフスキーの影響を強く受けた人ですが、彼はザンデ族 Zande とヌア族 Nuer の調査をして舞踊にも若干言及しています。

この他の19世紀末の J. Mooney の ghost dance, 1930年代の Fergusson の Pueblo 族の踊りの研究などは異色のものといえます。

このように人類学の歴史のはじめから舞踊は折にふれてとりあげられてきました。

しかし、1950年代以来、舞踊は正当な人類学的研究のテーマとしてとりあげられるようになります。1950年代の Gertrude Kurath の業績は別にして、60年代以降の主な業績を年代順にみてまいりますと、61年にマーチン・ジョルジ M. György とエルノ・ペショバル E. Pesovar がハンガリーの民族舞踊について、64年、ローラ L. Lawler が古代ギリシャの舞踊について、ハンナ J. Hanna がアフリカの踊りについて ('65, '66, '67), ケプラ A. Kaeppler が言語学的観点からトンガの踊りについて、('67) ケアリノ・ホモク J. Kealinohomoku がホピとポリネシアの踊りについて ('67), バルタニエフ I. Bartenieff が原始文化について ('67), メアがゴースト・ダンスと類似の運動について ('67), ロマックス A. Lomax が舞踊計量学について ('68), ピーターソン A. Peterson が Oaxaca について ('68) スターズ M. Stearns がジャズ・ダンスについて ('68) ラスト F. Rust が中世から現代にいたる英国の社交ダンスについて ('69) 論文を発表しております。

こうして60年代にレールのしかれた舞踊の人類学的研究は70年代には一層活発になりますが、70年代になると、いろいろの雑誌などに、論文が散発的に発表されるというのではなく、シンポジウムや著書や分担執筆の形で活発な発表がつづきます。何よりもその先陣を切ったのは、72年 CORD が出した「舞踊研究における新しい次元・人類学と舞踊・アメリカ・インディアン」New Dimension of Dance Research, Anthopology of Dance) という年報です。この中には、70年代の人類学的研究の重要なものが数多く収集されていますが、ロイス A. P. Royce が「今日の舞踊学」と題して舞踊の人類学的研究の総括を行っており、J. ハンナ, J. ケアリノ・ホモクらの論文がみられます。

1975年にはポーランドの舞踊学者であるロデリック・ランゲ R. Lange が「舞踊の本質、人類学的観点」(The Nature of Dance) という著書を

だしていますが、これはヨーロッパの民族学の伝統に立った舞踊の人類学といえます。72年にはCORDの年報が、再び「舞踊についての二つの人類学的研究」と題してケアリノキモクとドナルド・ブラウンの論文をのせていますが、これはもともと、ケアリノキモクが1965年、ブラウンが59年に発表した論文の復刻であり、各著者の前かがみが反省的回顧的に述べられています。

'77年には民族音楽学者のブラッキングとケアリノキモクの編集によってPerforming Artsが出ていますが、この中には編者自身の論文をはじめJ. ハンナ、他の興味深い論文が集録されています。

そして最後に1979年にロイスA. P. Royceは「舞踊の人類学」を著わし、1972年CORDの年報の冒頭の論文「今日の舞踊学」(Anthropology of Dance)を補充するとともにようやく舞踊の人類学が、その発展の基礎をかためて新しい時代に入りつつあることを指摘しています。

このような70年代の特色は、60年代の業績を土台にして、舞踊の人類学を一層発展させながら、学問としての体系を一応とのえたという点にあると思います。特にロイスの著書「舞踊の人類学」にいたって舞踊の人類学はその基礎を確立したとみることができると思います。

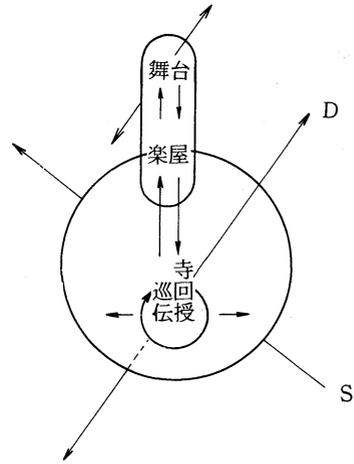
ここで舞踊学に大きなインパクトを与えた四つの著書を指摘しておきたいと思います。(スライドー R. L. Birdwhistell, A. P. Merriam, J. Blackingらの著)

'66年代、'70年代の研究を一つ一つ述べることは時間の関係でできませんので、私なりに総括いたしますと、次の10項目に整理できると思われるます。

- 1) 舞踊の定義
- 2) 舞踊と文化
- 3) 芸術舞踊と民族舞踊
- 4) 西欧中心 → 各文化圏中心の見方
(相対主義)
- 5) Cross - Cultural, Map.
- 6) 文化変容
- 7) 対象の変遷
- 8) アメリカとヨーロッパの舞踊人類学の相違
- 9) 舞踊と音楽
- 10) 言語学の影響

最後に、インド・ネパールの舞踊のうちからヤクシャガーナについて短い考察を行って終わりたいと思います。

ヤクシャガーナの構成は、寺での奉納、寺から楽屋への行列、楽屋での化粧、祭式(ブージャー)燈明をもつ行列、舞台へ、前座、舞踊劇、神への奉納、楽屋への行列、楽屋での祈り、巡回、子ど



も達へラマヤナの伝授、生活にもどる、というようになります。

さて、舞踊芸術になれた私たちには、舞踊のはじめと終りははっきりしているように思われます。つまり幕が開くときが始まりで、降りるときが終わり、その間が現実と異なる常ならぬマイクロコスモスを形成していることとなります。しかし、ヤクシャガーナに限らずいろいろの民族舞踊ではこのはじめと終りは必ずしも明らかではありません。ヤクシャガーナはdance dramaの部分だけでなく、寺から楽屋へ、楽屋から舞台へ、そして再び舞台から楽屋へ、楽屋から寺へ、寺から家々へそこから各自の生活へと全体を包含するものと考えられます。ここではヤクシャガーナは現実の世界とは別なマイクロコスモスを形成するのではなく、その頂点において人々をラマヤナの神話の世界へ誘いはしますが、その場所は現実の世界の深層に横たわるものでもあります。こうしてみますとヤクシャガーナがいつはじまり、いつ終るかは簡単には断定できず、それは文化・社会の全コンテキストのなかでsynchronicに、またdiachronicにとらえなければならないものと考えます。

以上、舞踊の人類学の100年を概観し、特に1960年代と70年代の舞踊人類学についての考察を行い、最後にヤクシャガーナを例に舞踊のはじめと終りを問うことによって、舞踊は文化全体というContextのなかでしかとらえられないことを述べました。

舞踊の人類学の百年を展望し、試論として提出された故石福恒雄氏の広遠な視野と識見が、今後につづく研究者に生かされることを願い、第12回舞踊学会(1981.11.14)の発表草稿及びスライドから、この稿をおこしまとめました。

氏への惜別の念と共に一。

(松本千代栄)